の子分に其金子を持たして、甚兵衛を連れて豐後町へ歸つて參りましたが、甚兵衛も震へ上つて驚いた　英『扨て甚兵衛さん斯う云ふもんだ、博奕は必ずしも止しなさい、サア借債は如何程あるか借金取を此處へ皆んな呼んで來なさい』と云はれて方々へ呼びに參つて處直ぐ參つた者が二十一人あつたと云ふは隨分借りも借りたもんで　英　扨て斯ふ云ふ譯だから利息は負けて呉んなさい』と云ふ貸た者も直ぐ取れるのだから、利息を負けて仕舞ふ、其處で其借を殘らず返して仕舞つて　英『扨て甚兵衛さん此處に金子が是れだけ餘つて居る此金子を資本に爲て元の道具屋を立派に立てなさい』と餘つた金子を八百兩殘らず甚兵衛に遣りました、甚兵衛夫婦娘に至る迄涙を流して禮に及ぶ、然んな事は耳にも掛けない大前田英五郎、二人の子分を連れて是より播州舞子ケ濱見物と出て來る、達摩の喜八が播州舞子ケ濱に喧嘩を賣るの一件……。

〔一二〕　英五郎旅盗に掛る

英五郎主從は甚兵衛の身代を元の如く立派に直して遣はし、爰で大阪を出立をいたし、播州舞子ケ濱を見物をいたさうと云ふので、道頓堀を出立に及び、ブラリ〳〵と發足に及びましたが、道々久藏金五郎　久『イヤ實に親分好い功德を爲ました、全く行く先〴〵で功德をして和郎さん位へ慈悲深へ人は世の中に無へ、達摩の喜八の野郎驚きヤアがつたらう』英五郎ニヤリ〳〵と笑ひながら　英『ナニ是も盆の垢を舐めて大勢を養ふ商賣、此位への事は當然で、陰德あれば陽報ありだ、何うせ破戸者の寄合だに由り此位への事は當然だ、身體で爲て遣らにやア罪が汚びねへから、金も久も乃公より跡へ殘る人間だに由り、成丈け功德は出來る丈け爲て遣るが好い』久『然うでゲスなア何も』と話し〳〵舞子ケ濱へ掛つて來る、淡路島を左りに白眼んで右は名代の布曳の瀧、日本の三景は奥州松島、安藝の宮島、天の橋立、是を天下の三景と云ふ、一段下つて此舞子ケ濱、田子の浦の景が好い、なれども此江戸の者は何處の景色が好いと云つて、往つて見やうと路金を首に掛けて見物に出掛けまするが、然し同じ處に一ト月も居れば飽々爲て仕まふ、たまに目先が變るから美事だと思ふので、江戸の者は居ながらにして名代の名所を鼻ッ先に置き、何處が好いと云つて向島位ゐの景色は無い、後に綾瀬を置き向ふに五色の富士の眺め、横に紫の筑波山

を睨んで、樹木に富み、前に中洲を挾んで待乳今戸を眺め、堤から今戸を見て好し、今戸から堤を見て好し、枯野に好し雪見に好し、花見に好し月見に好し、春夏秋冬四季の眺望め、先づ隅田堤位ゐの處は無いけれども、此江戸ッ子の癖として、目に飽きて居るから好な痴言を吐て、くさすやうなものゝ、何處が好いと云つて此位ゐの絶景は無い、會に見れば膽を潰すでございませう、扨て播州舞子ケ濱も實に見渡した景色は天下有數、笠を提げて三人は那方此方を眺めながら來ると　甲『ソレ來た、疊んで仕舞へ』と那方の松の小影此方の松の小影より得物々々を提げてドッと一度に乘出して來たが、前後をギリ〳〵と押取卷き眞つ先に立つて、布を疊んで鉢卷とし、晒の襷を掛け長脇差を打込んで達摩の喜八　喜『ヤイ英五郎、好く汝は乃公の商賣を妨げたな、サ汝エは上州一の博奕打かア知らねへが、上方邊りまで來て汝エに商賣を妨げられちやア上方者の耻に成る、汝等の素ッ首は貰つた覺悟を爲ろ』と長物の柄に手を掛けた、相摸の金五郎氣早の奴だに由り　金『何を八釜敷いやい、何を野痴言を吐きやアがるのだ、如何樣で素人の錢を奪ふ博奕打の面汚しだに由つてア、爲たんだ、サ汝等を片ッ端から叩き締め、關東者の腕の程を見せるから合掌組んで覺悟を爲ろ』と長脇差の柄に手を掛けてギラリと引拔たり、久藏も相撲上りの腕達者　久『巫山戲た事を吐すな、百人でも二百人でも向つて來い、上方の奴等の樣に豆腐柄と茶空で育つたんじやア無へ、關東者の腕を見ろ』と金五郎と背中合せに突立ち上る、英五郎は兩肌を脫押て、下には南無妙法蓮華經の下襦袢、五郎正宗の七首を逆に返し、松を木楯に突立直る　一同『ソレ疊んで仕舞へ』と八方から切つて掛るを左右に分れて相摸の金五郎霧の海久藏、バッタ〳〵と切捲る、親分子分三人の伎倆の勝れたのに切立てられ、一同は崩れて跡へ退がる、達摩の喜八聲を揚げ　喜『退がるな一同、僅た三人だ疊んで仕舞へ』と身を揉んで先に立ち、聲を限りに呼はつて、舞子ケ濱に火花を散して戰つて居る、處へ足早に飛んで來た一人の男　男『退け……退け〳〵』と大動の者を右と左りに拂ひながら飛込んで來て、腰に帶びたる銀の胴金入りの長脇差を引拔たが　男『何を爲やアがる』と飛込みながら物も云はずに達摩の喜八の後から喜八の首をバラリと大地へ叩き落した、大勢の者は驚いて　子『ヤイ何んで喜八の首を落したんだ』と一同の者が顏を見ると云ふと、後から見ると崖に蜻蛉が止つたやうな、前から見ると禿山のやうな其頃大阪で流行つた小さな

髷で制毛が長い　甲『ヤー誰かと思つたら和郎さんは永淺黄の親分じやアございませんか、何んで喜八の首を落したんです』　忠『八釜敷いや此奴等ア、汝等は何んで喜八に腕貸しを爲やアがつたんだ、達摩の喜八は如何様を爲て堅氣の者の金子を取り惡事を働いた罪がある、浪花伊達士の耻だに由り首を落したのが何う爲た、一同退け……退く事が成らねへと云やア乃公が相手だ、來い片ッ端から灘波三郷の伊達士水淺黄の忠吉が相手に成るから來い』と長脇差を取つて、達摩の喜八の首を提げ立上つた、此人は大阪三郷の伊達士で日本中の博徒に交際を爲て、上方者は吝つたれだと云ふが、上方者に似合ない交際の好い人で、天保水滸傳の講談にありますが、笹川の岩瀬の繁藏が花會の時なぞは、傍に居た飯岡の助五郎が名代を立つた位ゐだのに、此人は態々上方から下總の笹川村迄出張つて來た程の氣性の好い人、何が扱て當今は年老て物も控へ目に爲て居る。英五郎が水淺黄の忠吉と云ふのを聞て　英『此人は尾張の久六の兄弟分、毎度久六から上方筋へ往つたら、中々話し相手に成る男だから是非尋ねて遣んなせへと云はれて居たが、悉皆忘れちまつた濟まない事を爲た、扱ては此人が久六が自慢に話す水淺黄の忠吉だな』と思つて居る内に忠吉血を

拭つて鞘に納め　忠『扱て大前田の貸元、御目に掛るのは今始めてだが、毎度御名前は雷の轟くが如く承知爲て居り升した、又尾張の久六よりも聞て居りましたが、家の奴が大前田の貸元が是れ〳〵だと云ふ、且つ道具屋甚兵衛の話しを聞き、一遍は御目に掛らうと思ひ道具屋甚兵衛の家へ尋ねて行き、大前田の貸元は居さつしやるかと尋ねたら、舞子ケ濱見物に行かしつたと云ふから、跡を飛んで來て折好く御目に掛りました、然し此處は往來でお話しも出來ない、貸元一寸向ふ迄御出でを願ひませう、達摩の喜八が無禮を爲たのは何卒忠吉から御詫を爲る、御勘辨を願度う存じます』と喜八の首を其處へ出して挨拶を爲る英五郎も切るだけの罪は無いが討つて仕舞つたものは詮方が無い、叮寧に挨拶を爲て、先づ兎も角もと云ふので英五郎を舞子ケ濱の茶屋旅宿へ連れて參り、悉く英五郎を叮寧に周旋ちまして　忠『誠に關東の達士に灘波の達士が無禮を爲たと云ヤア浪花一統の耻、決て然んな亂暴な者斗りも無いに由り、此座切り何卒水に流して頂きたい』と云ふ、英五郎が水淺黄の了見を見て　英『成程此人は上方に似合ざる人物だ』と思ひ　英『兼て和郎さんの御名前は尾張の久六から手に取るやうに承知いたして居りました、大和廻りを掛けて來たに由

り御尋ね申すべきだが、色々用事あつて、遂夫念を爲たと云つちやア濟まないが、御尋ね申す處にも至りません、是を御縁に切望末長く、御互ひに息のあらん限り御交際を願ひます』と云はれて忠吉は悉く悦んで　忠『兎も角も貸元、舞子ケ濱の見物を濟ましたら、何處にお出でに成るかは知らないが、大阪へ一遍戻つて戴きませう』英五郎も無氣に袖も拂ひ兼ね　英『左樣ならば』と忠吉に誘はれて大阪へ歸り、水淺黄の忠吉の家に參る。此人は大阪堂島に住居を爲て居る、大阪では水淺黄の忠吉に今辨慶の辰五郎と云ふ二人が高名なもので、代々今辨慶辰五郎、水淺黄の忠吉であり升が、扨て大阪へ歸つて忠吉の家に十日斗り厄介に成つて居りましたが、何日迄居ても同じことだから　英『是から金比羅へ參詣をいたし、何れ戻りには又改めて御厄介に成りませう』と云ふじ　忠『やア歸りに是非寄つておくんなせへ』と忠吉の家を出て、是から川口より船に乘つて讃岐の丸龜へ着かうと云ふ、乘合の者も大勢ある、英五郎は親分子分船に乘り、乘合の者一同で名々國の自慢抔を云つて居るのを面白さうに聞て居りましたが、軈て退屈に成つたか、水淺黄から送つて呉れました酒を出して、三人で飲みながら話しを爲て居ると、年の頃三十格好の色の淺黑い旅商人　男『貴郎方は金比羅へ御參詣にござい升かい』　英『左樣でござい升』　男『私も金比羅へ參詣に參る者で、實は私は名古屋本町の塗物問屋の桑名屋源兵衛の番頭でござい升、金比羅樣へ主人の代參に參る者でござい升が、主人より少と大金を預つて參りました、道中は胡摩の蠅と云ふ奴がありますさうで、一人旅は實に心細うございます、何卒金比羅樣迄御同道を願ひたいもんで』英五郎聞て居たが　英『ア、ー然うでござい升か、却て旅は大勢の方が話し相手があつて宜うございます、御同道申上げませう』久藏金五郎は其男の顏色を見て居りましたが　金『親分止せば好いのに、詰らねへ者を一緒に……』英『マア好いさ』扨て丸龜の港へ船が着て、其夜は丸龜の御城下へ泊り酒を飲んで面白可笑く話しを爲て、遂々枕に着き夜が明けると、英五郎目鋭いから目が醒めて見ると、枕許へ昨夜置た煙草入れ、振り肩げの荷物、皆んな無くなつちまつた、桑名屋源兵衛の番頭も居ない、金五郎も久藏も前後を知らず寢て居る　英『金も久も起きなヨ』二人目を覺して　久『何んでゲス』　英『何んだぢやア無へ、荷物が無くなつて仕舞つた』　久『エ、……ヲヤ夫りやア好いが枕許へ置た錢が無へせ』霧の海久藏邊りを見て　久『サア大變だ蒲團の下へ入れて置た三百

兩の胴卷が無へぜ……ヲヤ乃公の紙入れも無へ……兄貴和郎のはあるか』　金『乃公のも無へや』　久『如何程這入つて居たんだ』　金『五十二兩ヨ……和郎のは』　久『乃公のは七十兩計りだ、千日前で儲けた錢を二人で小遣へに爲て居たんだが、未だ乃公のは使ひ餘しが七十兩計りあつたんだ』　金『五十二兩に七十兩に三百兩……皆んな持つて行かれちまつた』　久『驚いたねへ親分、小出しは構はねへと爲て三百兩を持つて行かれまつちやア仕方が無へ、御覽なさい枕許にあるのは金五郎のカマス煙草入れと刀が殘つてるッ切りだ驚いたねへ』　金『何うも親分困りましたね何う爲ませう』　英五郎蒲團の上に腕を組んで居たが　英『皆んな持つて行かれちまつたか』　久『皆んな處じやア無へ百もありやア爲ません』

英『ハ、、、何うも面白へなア』　久『面白かア無へぜ、皆んな持つて行かれちまつて何う爲るんだへ』　英『何う爲るッて仕方が無へ、然しマア成程胡摩の灰てへ奴は旨へ事を爲て持つて行きやアがるもんだなア、世の中に大前田英五郎の金子を取らうと云ふ奴だから、成程胡摩の灰てへ者は太へもんだ、然しマア金も久も悅べ博徒でこそあれ英五郎も胡摩の灰に三百兩取られるやうな身分に成つたから悅んで呉れ』と英五郎は三百兩取られて笑つ

たと云ふから、此處等が關東一の大貸元の價値のある處です、腹の大きなものだ、大抵の者は三百兩處じやア無い、白胴を一ッ落して御覽なさい皿の樣な眼付で探して歩く、大貸元の腹は違つたもので　久『然し親分一文無しじやア仕樣が無へね』　英『據無へから旅宿の主人に談判して宿錢は借りて行かう、何うせ此處迄來たもんだから、高山村の霧島文藏の處へ往つて如何程か借りやう』　金『違へ無へ、然うだね文藏の處へ往つて借りたら宜からう、其處で主人を呼び　英『實は同道爲て來た人間が胡摩の灰で、皆んな取られて什舞つたから、御氣の毒樣だが切望戻り迄旅宿錢を貸て下さい、高山村と云ふ處へ往つて、金比羅樣へ參詣を爲て戻りに屹度御勘定は爲ますから、旅宿屋の主人も氣の毒に思ひまして、

主『何ういたして拙者ん處の旅宿錢は些少なもので、御拂ひ無くとも宜しうございい升が、嘸貴郎方は御困りでございませう』　英『イエナニ高山村迄參れば何うにか成り升から』

主『誠に御氣の毒樣で唯今朝飯を差上げませう、御酒も進げますから』主人も氣の毒に存じて、猶叮嚀に爲て、御酒を付け御飯も出したが、人情と云ふものは妙なもんで、錢を出すと思ふと一杯も飯を餘計に喰ふが、何んと無く三杯の物も二杯にして什舞ひ、酒も御馳

走に成つたつて酔やア爲ない、扨て御飯を仕舞つて　英『何れ歸りに御勘定を致しませう』と三人連れで丸龜の旅泊を出たが　久『アー驚いた、何うも親分人間は錢が無くなると根性が吝つ垂れに成つて不可ねへねへ』　金『然ふヨ何んだか腹が減つて來たなア』　英『今飯を喰つたじやア無へか』　金『喰つたつて身にも皮にも成りやア爲ねへ……兄貴酔つたか』

久『ナニ酔うもんか、今何時だね』　英『然うヨモー日の樣子じやア午の刻少し過ぎたかな……』　金『道理で少し腹が減つて來やアがつた、未だ高山村迄餘程あるかね』　英『乃公も知らねんだから聞ながら行くんだ』　金『ヲヤ〳〵……』金五郎向ふを見ると芋屋で今釜から出し立ての蒸し芋、ポツ〳〵と煙が出て居る　金『旨さうな芋があるなア、芋を買つて喰はう』カマス煙草入の中を搔廻して漸う錢を十二文出して　金『何うだい三人居て錢が十二文きやア無へせ』關東一の大貸元の四天王が芋を買ふやうな終末、突然芋屋へ飛込んで　金『ヲイ婆アさん芋を一本買んねへ、一本で好いから大きい奴を……』　婆『ヘエ左樣なら』と凡そ何うも長さが八寸もあつて、周りが一尺もあらうと云ふ芋を一本　金『有難へ〳〵』煙の分るのを持つて來てヲッペショッて　金『サア親分御初を……』英五郎も腹が

減つてるから喰始めた、軈て今度は引繰返してビシリと折り　金『兄貴二番目を』霧の海久藏芋を取つて　久『親分和郎喰つちまつたかい』　英『暖かくつて旨かつたから喰つて什舞つた』　久『喰はねへで金に返して遣れば好いのに』　英『何故……』　久『金は人の惡い奴だ親分お初をと頭の方を打べしより、兄貴二番目と云ふ處は强勢好いが、此方を引繰返して尾の方を乃公に呉れやがつて、汝は中央の旨へ處斗りを喰つちまやアがつたんで』英五郎が　英『成程金の野郎人の惡い奴だ』　金『ナーニ乃公も然んな事は氣が附かなかつたのだ』是れが英五郎歸宅の後に日記に記まり、大前田雜報の中に記してあるには、丸龜で賊に出逢ひ三百兩取られて三人で芋を十二文買ひ、是を食した時の可笑しさは幾何ぞやと載つて居ります。中々風流氣のあつた英五郎。却說讃岐の國高山村に霧島文藏と云ふ者がある、此者が若い時分盛んに相撲を取る時分に、上州へ參り、大前田一家の者が一方成らず世話を爲て遣り、英五郎が相撲は年を老つて出來るもんで無いから、早く今の內身を極めろよと意見を爲て遣り、大前田一家の者が若干の大金を拵へて遣て、猶花相撲又は旦那方に賴んで金を集め、其金子を持たして故郷賛岐へ歸して遣り、其金子を以て今では樂々世を送

つて居る霧島文藏、是れへ尋ねて往つたに由つて、文藏も喫驚して　文『マア〳〵當分逗留を爲てお呉んなさい』　英『イヤ〳〵逗留を爲ちやア居られない、實は是れ〳〵だから五十兩斗り用立つて貰ひてへ』　文『五十兩は愚か如何程でも……』と昔の恩があるから文藏が叮寧に世話を爲て、此處で五十兩の金子を借りて金比羅樣へ參詣に及び、目出度く參詣を濟まして戻り道、那の丸龜の宿屋へ來て旅宿錢を拂つて、英五郎主從再び丸龜の港から船に乘り、大阪へ出て來る、スルと最早川口へ水淺黄の身内が出向て居りました、又忠吉の許へ參り爰で厚く世話を爲て呉れましたに由つて　英『何れ上州へ立歸り又改めて御禮に伺ひませう』と暇を告げ、今度は東海郎筋を段々下つて尾張の久六の許へ來て、英五郎段々と話しを爲るのを聞て久六が　久『誠に水淺黄は好い人間だ、是からズーと兄貴上州へ歸るか』　英『是から上州へ歸るが、夫に就て水淺黄の許へ和郎から禮狀を出して貰ひたい』　久『ア、ー承知した』と久六の家に十日斗り泊つて此處を立ち、段々と下つて參り、英五郎目出度上州へ立歸りました。上州へ歸れば金子は自由に成る人だに由り、五十兩を爲替にして高山村文藏の許へ返し、英五郎國に永住を爲て居りました内に、其翌年に霧の海久

藏は博奕兇狀で御用便に成り、遂に江戸表へ御差立てに成り、久藏は愍むべし傳馬町の牢屋で死んで仕舞ひました。然るに其後別段にお話しも無く、年移つてハヤ三百年來の德川の御世は瓦解を爲る時節と見えて、大名小名二タ分れに成相り、親が勤王家なれば悴は佐幕黨、悴が勤王家なれば親は德川を佐けやうと云ふやうな光景で、世間自ら血腥く諸國に騷動が絶間無くなつて參りました、就中常陸の國筑波山に暴黨が立籠り、此時に田沼玄蕃頭殿、上州舘林の城主秋本但馬守殿、常陸の筑波山へ向ふに就て、舘林の家老小林庄之助及び殿には、大前田一の身内江戸屋虎五郎御呼上げに成つて　庄『今般御主君常陸筑波山に對して御向ひに相成り、賊徒を追拂へとの事に付、其方も同道いたせ』と云ふ命、虎五郎は十手捕繩を預つてる身の上だに由り　虎『承知いたしました』と其處で殿樣から五十兩、庄之助殿から五十兩賜はりました、其處で右の百兩を頭立つた子分に五兩宛、唯の子分に二兩宛遣はし、是から虎五郎身内を從へて小林殿の旗下へ尾て常陸の國へ向ふ途中、運好くも賊徒は平定して仕舞つたと云ふので、虎五郎は途中から戻つて參りました、是より諸國に一揆賊徒蜂の如くに起り、上州地方へも良民を苦しめに參る者が夥しい、其内

に時移つて慶應四年五月十五日、看客御存知の上野の戰爭……是は十五日に始まるべきでは無いのでござい升が、餘り彰義隊の亂暴が激しいので大總督有栖川宮が御立腹に相成つて、十五日に始まりましたのでござい升、なれども此上野の歴書を見るに、ヤレ因州の兵が二千押て來たの、薩州の兵が二千來たのと途法も無い放言が吹てある、講釋師扇で嘘を敲き出すと云ひ升が、中々釋師裸足で逃げ出すやうな嘘が書てあります、然るに當今の方は是を信じて御出でに成り升が、眞實に申上げると、官軍は三千とは無かつたので、其譯如何んとなれば、先年御他界の有栖川宮が大總督で京都から御下向の時は、京都から大津迄は主從三十六人で御下りに成つて、大津で五幾七道の大名が味方を爲て、夫から東海道を下つて參つたので、然れば其上野へ向つたのは薩摩が一番多くつて三百人、肥前大村の兵は僅た五十一人でありました、此上野の戰爭の事を琴後が委しく心得て居りますと云ふは、以前淺草公園第六區に擊劍會を開かれた社長野木貞次郎先生、此人は元大村益次郎殿の旗下に就て、官軍寄手の兵粮小荷駄の取締りをいたされて、自ら上野へ向はれた方、此先生から委しく實況を聞取つてござい升ので、實は爰に上野戊辰の役の講談を演りたいのでござい升が、紙數に限りもあり又本文に關係なき事なれば略し升が、扨て此上野の戰さが破れて大鳥圭助と共に日光へ籠らうと血を恐れず法を恐れぬ人々、陸續と上州地方へ乘込んで參り、或は路金を拵へろとか飯を喰はせろとか云つては、方々の家へ參る、先づ眞實の幕府方の者なれば幾分かの路金も拵へて遣りましたが、然う斯う爲る内に前橋、舘林、高崎等の豪民へ賊徒が押込んで來て、其難澁一方ならん事、其處で英五郎が　英『モー斯う成つては猶豫が出來ん』と大前田一家の者三千五百人を集めて、近郷近在の財産家へ分けて遣り　英『來たら片ッ端から腕盡で遣つて仕舞へ、モー是が御奉公の爲納めだ』と三千五百人で賊徒が押込んで來さうな家を守つて遣りました、舘林は舘林で虎五郎の人數手分けを爲て是を守り　一同『サア來やアがつたら叩き縊て仕舞へ』と皆支度萬端て相待つて居ると、或日の事上州高崎の城下の味噌問屋、是は英五郎の子分の、伊豆の新島へ往つて居る小久源太郎の子分清吉と云ふ者の姉が片付て居りまする家、此家を守つて居り升のが四天王の大此團兵衛、八人衆の玉川玉五郎に子分が三十人附て守つて居ると、野袴にチョキ袖を着用に及んだ侍が三人遣つて參りまして　侍『御免ヨ』　子『御出でなさい』　侍『吾

々は徳川慶喜公に從つて種々徳川の爲に盡力いたして居る者だが武運拙くも徳川政府は瓦解の端緒と成り、唯今江戸より落ちて參つた者、是より日光へ立籠る積りで參つた、徳川政府の世にいたせば必ず返すに由つて軍用金を借りたい』　子『ヘイ』奥に一同並んで見て居り升と其中の子分が　子『イヤ大此兄イ、那奴は徳川政府の侍じやア無へせ、那の野郎は常陸の水戸の博奕打で石井文吉と云ふ野郎だ』　團『ウム然うか巫山戯た野郎だ箆棒奴……』　團兵衛出て來て　團『御出でなせへまし、エ、當家はモー皆んな引取つて什舞つて、……』　團兵衛『軍用金抔を貸す丈けの蓄へはありません、御氣の毒』　侍『其方然う申すが此處の家は高崎一番の金滿家だ』　團『一番でも二番でも金子はありません、夫も誠の侍なら二分や一兩の端た錢なら路金にも進ますが、和郎達の樣なガマセ者には錢はやれねヘヨ、歸んな／＼』　侍『何んだガマセ者とは』　團『何をグス／＼云やアがるんでへ、汝達は箆棒奴博奕打じやア無へか、徳川樣の名前を騙つて歩きやアがつて、汝石井文吉だらう、巫山戯た痴言を吐きやアがるねへ』　侍『ナニ石井文吉だ、能く知つてるな、石井文吉に違へ無へ、片ッ端から首を並べるから覺悟を爲ろ』　團『何を吐しやアがるんだ、大前田四天王十哲の一人、大

此團兵衛、玉川玉五郎の居るのを知らずに來たか……一同掛れ』と云ふと、竹槍を突て來る奴がある、刀を拔て來る者がある、玉五郎、團兵衛も長へ物を拔て飛出した、大前田の身内は強いから遂々三人を其處へ切倒し、一同で家の前へ獄門に掛ける、夫は劇暴な事と云ふ者は今の御方には見られません、斯の如き有樣で御座るから、上州一國は大前田一家が居た斗りに賊徒が更に播つて來なかつた、他國では隨分金滿家が身代を滅茶々々に爲れた處もあつたが、上州一國は至つて穩かに濟みましたと云ふのは大前田英五郎の盡力一方ならざる處であり升、其處で御維新と相成り、英五郎は上から此れが爲に御褒美を頂戴いたしましたが、是れ迚も一人で取るやうな親分ではありません、子分一同の者に分けて遣りました、此處で愈々明治と相成り世も穩かに成りました、自分も追々老る年だに由り自分は妻も無し妾も無いから子のある道理もありませんから、新吉と云ふ者を十四の時養子にして、此者に兄の名前揚吉を繼がせ、田島揚吉として家督を爲して居りまする内に、時移つて明治七年に相成り、正月より床に就きまして、遂に八十二歳を一斯として二月二十六日沒しました、實に珍らしい人で、佐渡破りの兇狀もあれば種々の事をいたして、夫

で疊の上で芽出度往生をいたしましたが、菩提所は第一回に辨じたる通り、上州南瀬田郡苗ケ村淨土宗蓮松山金剛寺、法號は勸光院得壽英翁居士、墓の高サ五尺餘にして、施主の名が五百餘名彫付けてあり升。然して昔年名古屋に於て、大火の時に盡力いたして頂戴爲たる大小、あられの袖無し羽織、立付け袴、熨斗目、五郎正宗在銘の刀、是等の品々は空櫃の内に入れまして、唯今以て南瀬田郡大前田村養子田島揚吉方の家に歴然として殘つて居り升るが、明治二十七年二月より同年七月迄上州地方へ趣き、英五郎の一代を調べ上げて、是れを上州土生大前田英五郎の傳として申上げましたが、是があら〳〵大尾でございます、永々御退屈様……。

俠客　大前田英五郎　終

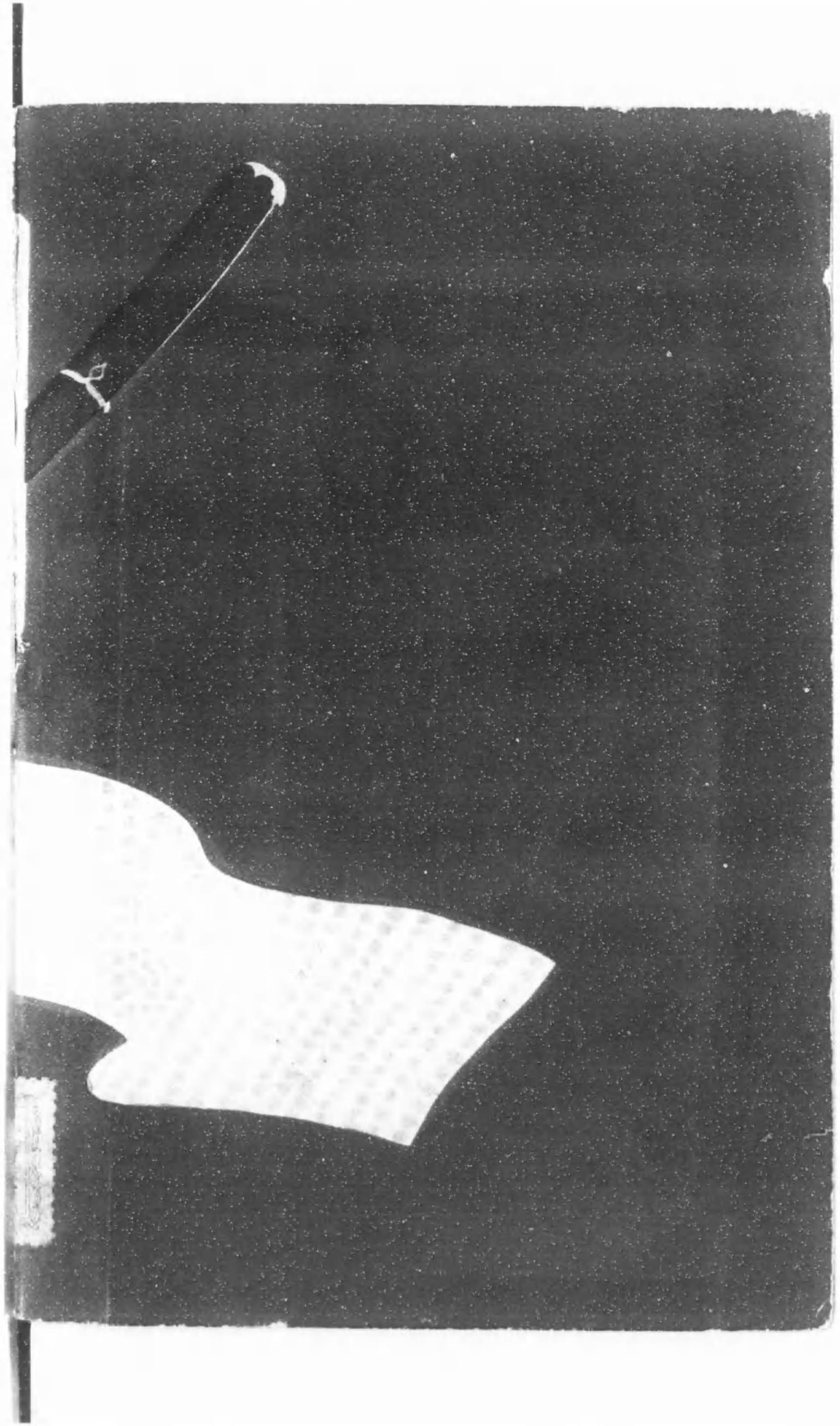
昭和拾壹年八月五日印刷
昭和拾壹年八月十一日發行

【定價金貳拾錢】

不許復製

編輯所　名作長編講談全集編輯所
發行者　東京市淺草區藏前三丁目六　大川錠助
印刷者　東京市淺草區藏前三丁目四　小宮定吉

發行所　東京市淺草區藏前三丁目六　大川屋書店
振替東京四〇〇九
電話淺草二一七八



終